

る。自分と楠緒子の関係を振りかえると、いつもそこに糸重と百合子がいた。自分は彼女たちの中に入れなかった。自分こそが楠緒子の理解者だと思っているのに。四十五歳の分別をもつてしても、そんな煩惱に襲われるのだろう。まだ修練の途上であった。

しかしもしそうだったとしても、この部分を目に見るのは、個人的にためらわれる。糸重は反論しようと思えばできた。だがこの時点で既に亡くなっている百合子には何もできないからだ。島崎藤村の恋人というキャッチフレーズがついて回る糸重と違って、百合子は今では全く知られない存在となっている。この際、彼女が時間の澱みに沈みこむ前に、その人となりを書いておくのも無駄ではないと思う。

百合子の資料のうち、

・長谷川時雨「峰百合子」（『婦人画報』大正八年十一月「美人伝」として掲載）

・「東京婦人の化粧」（『女学世界』明治四十三年三月掲載 百合子へのインタビューを女性記者がまとめたもの）

この二つは大塚楠緒子の研究者、横路万寿子さんから教えていただいた。いずれ横

路さんは楠緒子との関係で百合子像を書かれると思うが、一足先に資料を使わせて頂く。

1 百合子のプロフィール

右にあげた資料、及び『明治文学の片影』（佐佐木信綱著）、『典籍説稿』（山田孝雄著）、「心の花」（大正八年十月号の峰百合子追悼文）の記事を合わせると、百合子のプロフィールはおおむね次のようになる。

百合子は樋口光義のひとり娘として明治八年、日本橋石町の父祖代々の屋敷に生まれ、そこで育った。住所は、日本橋十軒店大通り西側と伝える。兄が一人いる。

実家は三代続いた幕府の漢方眼科医である。曾祖父は三生といい、天璋院に仕えた。祖父は三奎といい、高野長英と共に蘭学を学んだ。漢方に合せて新しい医療を応用し、蘭書を翻訳したという。

父光義も家業を継いだ。光義は好事家としても名があり、趨古と号した。明治初年、家業を息子直清に譲る。和漢の古印を収集し、その由来に詳しくったことを見込まれて、帝室博物館の雇員となった。初代館長町田久成のもとで研究を続け『宝信閣藏考』六巻を著した。光義は明治十一年

（一八八八）十一月一日死去。年は六十三、四であった。当時の番地で本郷六丁目にある喜福寺の墓域の北隅に、樋口家四世の墓が並ぶ。

兄は樋口姓を継いだ。が、外へ出たため、家業は百合子の夫峰秀世が継ぎ、百合子たちは父祖の家にひきつづき住んだ。

百合子は明治女学校で教育を受けている。信綱の妻雪子（明治七年生まれ）も大塚楠緒子も明治女学校出身である。信綱は百合子が楠緒子と知りあったのは「楠緒子さんとは、同人どちで親しくなられた」と「心の花」が二人の出会いの場だったと書いている。知りあつてからは女学校での話題が二人の距離を縮めたかもしれない。

竹柏会への入会時期ははっきりしない。

明治三十三年四月に「心の花」の第二回親睦会が日本橋倶楽部で開かれた時には会場係として参加している（「心の花」明治三十三年五号「竹柏会第二回親睦会記」）ので、それ以前の入会、創刊間もない頃からと思われる。同年七号の佐々木弘綱十年祭献詠歌のなかに「峰百合子」の名で一首が載り、同年九月には小品（短編小説）「朝つゆ」が載る。明治三十三年には確かに入